

氏名	廣岡孝彦
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博乙第3351号
学位授与の日付	平成11年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Adequacy and Long-Term Prognosis of Endoscopic Carpal Tunnel Release (鏡視下手根管開放術の適応と長期予後)
論文審査委員	教授 田中 紀章 教授 清水 信義 教授 村上 宅郎

学位論文内容の要旨

本研究は特発性手根管症候群に対する鏡視下手根管開放術（以下ECTR）が優れた方法であるか否かを正しく評価し、ECTRでは及ばない症例に対する追加手術の時期を明らかにすることである。

対象は特発性手根管症候群37例41手で、臨床成績評価はKellyらの成績評価基準を用いた。しびれ、Semmes-Weinsteinテスト（以下SWテスト）、M波遠位潜時および知覚神経伝達速度は術後3ヵ月でほぼ回復し、約90%の症例が成績良好であった。残りの約10%の症例が成績不良であり、以後回復も認められなかった。また、術後3ヵ月での臨床成績良好群と不良群を比較検討した結果、1. 高齢、2. 術後3ヵ月時のM波遠位潜時が6msecより遅延、3. 術後3ヵ月時の知覚神経伝達速度が32m/sec以下、4. 術後3ヵ月時の知覚神経伝達速度SWテストが4.08より大きい2項目以上を満たす症例は、術後3ヵ月で追加手術を行う必要があると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は特発性手根管症候群に対する鏡視下手根管開放術（以下ECTR）の成績を評価したものである。

対象は特発性手根管症候群37例41手で、その臨床成績はKellyらの評価基準を用いた。しびれ、Semmes-Weinsteinテスト、M波遠位潜時および知覚神経伝達速度は約9割の症例において術後3ヵ月までにはほぼ回復した。残りの約10%の症例が成績不良であり、以後回復も認められなかった。この結果、成績不良症例は、術後3ヵ月で追加手術を行う必要があると考えられた。

本研究はECTRの成績をもとにこの手術の適応を明らかにし、また成績不良症例の判断基準、再手術の時期を明らかにして、この新しい術式の意義をより高めたと考えられる。よって本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。